

今年の三年生も

【シナリオ】

瀬井 隆

（1）あの家はなんなの

三年生に進級した私が、まずやつてみたかったこと。
それは、いつも見かけるあの家の秘密を探すことだつた。

学校までの通学路に建つ、あの家。

静かな住宅地の一角にある、なんてことのない二階建てなのに、私は以前からなぜか、その家が気になつて仕方なかつた。
うまく説明できないけど、全体が黒い霧に包まれたようで、周りとは明らかに雰囲気が違うような……。

道路に面した二階の窓には、半分くらいカーテンが掛かっていて、

いつも薄暗い部屋が覗いている。明かりが点いていたり、窓が開いているのを見たことがない。

奇妙なのは、時折そのカーテンが、ゆらゆらと揺れているように見えることだ。

もちろん私の錯覚かもしれないけど、カーテンの影に誰かが潜んでいるような気もする。まるで、じっと見上げる私のことを知っているかのようだ。

ぞくつ。

そのカーテンを見上げるたびに、私は得体の知れない感情に襲われ

る。

でもそれは、決して怖いだけじゃない。

恐怖心のなかにも、未知のものに対する好奇心、もしかしたら退屈な毎日から自分を連れ出してくれるんじやないかという、ゾクゾクした期待のようなものが入り混じっている。

私の黒い好奇心を惹きつけて止まない、あの家。
どうしてこんなに気になるんだろう。

(2) 年上の女性

その日いつものように私は、学校帰りにあの家の近くを通りかかつた。

やっぱり、カーテンが少し揺れているように見えて、思わず立ち止まって見上げてしまつた。

他の子たちは気にならないんだろうか？

あの家が怪しいと思つているのは、私だけ？

そんな私を、近所のおばさんらしい人がジロジロ見ながら通りすぎていった。

「毎年一人はいるのよねえ、あんなふうに見てる子が」

そうつぶやきながら。

毎年一人はいる？ 私みたいな子が？

スマホを取り出して検索してみた。うちの学校名と、「失踪者 行方不明」といったキーワードで。

ちょっと怪しい掲示板に、それらしい噂話が乗っていた。

毎年この時期、三年生になつたばかりの女子が行方不明になつている。

学校帰りに、制服を着たまま。全員が少しおとなしい感じの美少女だつて。

なに、これ……？

そのとき、こちらに歩いてくる女人に気づいた。
すらりとして髪の長い、若い女性。

春だというのに、長いコートですっぽりと全身を覆っている。

その人は近づいてくると、私にっこりと微笑んだ。

「ここにちは。あなた、ここでよく立ち止まって、窓を見上げてるわ
よね？　あの家に興味あるの？」

きれいな人。私よりちょっと年上なんだろうけど、すごく大人っぽ

い。

それに、この人、どこかで見たことがある。
どこだろう……。

返事に困っていると、彼女が身を乗り出してきた。

「ねえ、あなたが着てるそれ、この先にある学校の制服よね？
何年か前まで通つてたのよ。懐かしいなあ」

「あ、先輩なんですね」
「ふーん、あなたが、ね」

私も

こちらを見つめてくる視線はとてもきれいだけど、どこか冷ややかだ。

そのとき、ハツとした。この瞳をどこで見たのか思い出したのだ。
あの家のカーテンの影から覗いていた目だ。

(3) ようこそ、私たちの家に

私がちょっと引いたのがわかつたのだろう、お姉さんはにこりと笑つた。

「あら、そんなに怯えなくていいのよ。あの家に興味があるのは、別に悪いことじやないから。実を言うと、私も昔そうだったの」

「え、先輩もですか」

「そう。だからあなたの気持ちがよくわかるの」

「自分でもわからないんです。どうしてあの家がこんなに気になるのか」

お姉さんは意外な言葉を返してきた。

「行つてみればわかるんじやない？ 行きましょうよ、一緒に」

「え？ 行くつて……」

「大丈夫。実は私、あの家に住んでるの。あなたがこっちを見ているのに気づいて、降りてきたのよ。さ、行きましょ」

おかしい。どう考えても変だわ、この人。

逃げなくちゃ。頭の中ではそう叫んでいる。

でも私は動けなかつた。お姉さんが差し出す手に引かれ、私はよろよろと歩き出した。

これから入るんだわ。ずっと気になっていた、あの家に。

なぜか、ずっと前から、こうなることが分かつていていた気がする。

玄関に着いてドアを開けると、お姉さんは振り向いて私に微笑んだ。

「ようこそ、私たちの家に」

私たち……？

スッとコートを脱いだ彼女に、私はハッと声を上げそうになつた。

お姉さんがコートの下に着ていたのは、うちの学校の制服だった。ちよつと古びたそれには、三学年を示すバッヂが付いていた。

(4) 皆さん、今年の三年生よ

家のなかはシンとしていた。でも、誰かいる気配はする。
まるで息を潜めて、私たちの様子をうかがっているみたいに。

「二階へ行きましょう。皆に紹介するわ」

ぎしぎしと軋む階段を昇り、突き当たりの部屋のドアを開ける。

「皆さん、お待たせ。今年の三年生を連れてきたわ」

え、どういうこと。今年のつて……？

部屋にいたのは、三人の若い女性。

皆お姉さんに負けないくらいきれいで、そして、ああ……。

全員がうちの制服を着ている！

襟に付けたバッジの色は、全員が三学年のものだ。

そして一人は、四年前に廃止になった、昔のセーラー服を着ている。

あのおばさんの言葉を思い出した。

「毎年必ず一人は、ここでの家を見上げてゐるのよね……」

そんな。

まさか、そんなことって。

「ねえ皆さん、今年の三年生もかわいいでしょ？ 私たちの仲間に
なるのにふさわしいと思わない？」

皆がうつすらと微笑している。

私がここに来るのを、あらかじめ知っていたかのように。

逃げよう。

そう思つても、足が動かない。

怖くて固まっているんじやなかつた。
ここが私のいるべき場所だと、私自身が思い始めていたのかもしれ
ない。

(5) お姉さまたちが、私を

女性たちのうち、一人がゆっくりと私に歩み寄ってきた。

ほんとかわいいわと言いながら、優しく私の髪を撫で始める。

「ああ……」

私は思わずため息を漏らしていた。

気持ちいい。

同じ女性に、きれいな人に、こんなふうに髪を愛撫されるのが、こんなに気持ちいいなんて……。

もう一人、近づいてきた。

同じように手を伸ばして、私の横顔に指を這わせる。

優しく頬をなぞり、くすぐるように耳を軽く愛撫してきた。

「あ、ダメです、そこ……」

くすぐられて、ため息が喘ぎ声になつた。

ああ、どんどんいやらしい私にされていつちやう……。

三人目、古い制服のお姉さんも、楽しそうに近づいてきた。

私の頬に手を伸ばしてくる。

くいっ、と持ち上げられた。

「あ……？」

お姉さんの細い指が、私の唇をなぞる。
いきなりそれが、口の中に潜り込んできた。

「んふ……」

私は自分から口を開き、それを受け入れた。

歯の隙間からねじ込まれた指が、私の舌を探り当て、むにむにと楽

しそうに弄んでくる。

「んんっ、むふう」

ああ、私の舌、遊ばれちゃってる。

すごく惨めなのに、ちつとも嫌じやなかつた。むしろうれしくて、もつとして、と思つてしまふ。

私を連れてきたお姉さんが、くすりと笑う。

「まあ、この子つたら、もう気分出しちやつてるのね。はしたない。やっぱりこの家にふきわしいわ」

え、どういうこと。

「その指を舐めて『らんない』。いやらしく、ね
「ふあ、ふあい」

ぴちゃや、ぴちゃや、ぴちゃや。

指を舐めながら、私はうつとりとしていた。
美味しい。

口に突っ込まれた指を惨めにしゃぶられるの、すゞくいい……。

気がつくとしやぶりながら、自分の胸に手を伸ばしていた。
制服の上から乳首をカリカリする。

「むふう……」

れろれろといやらしく指を舐めながら、私は甘い吐息を漏らした。
膝ががくがくする。体が火照つてくる。
乳首だけでは物足りなくて、スカートの中に手を入れた。

「むふうううう」

ショーツの上からクリトリスをカリカリしながら、私は立つたまま

悶
え
続
け
た。

(6) 私も、なれますか……？

きれいなお姉さんたちに体のいろんなところを弄ばれながら、私は立つたままオナニーを続ける。

「ほんと、いやらしい子。私たちに遊ばれながら自分でするのが、そんなに気持ちいいの？」

連れててくれたお姉さんがそう囁きながら、私の耳に「ふつ」と息を吹き掛けた。

「はあああん！」

ガクン、と崩れそうなのをこらえ、私は指を咥えたまま半泣きになる。

「気持ちいい、気持ちいいです。お姉さまがたに弄ばれながらオナニーするの、気持ち良すぎて、立つたままイっちゃいそうです」

「あら、かわいい顔して、そんないやらしいこと言うのね。い・け・な・い・子」

また耳に、ふつ。

「はうつ！」

「ほら、ちゃんと立ってなさい。自分でもちゃんとクリちゃんとをさわるのよ。私たち皆で、イクのを見守ってあげる」

快感の海に溺れそうになりながら、私はネットの掲示板の噂を思い出していた。

毎年、三年生になつた女子生徒の中から必ず一人が行方不明になる。その人たちが消えた先は、つまり……。

「あ、あなたたちは、ここでなにを……？」

「あら、まだ気づかない？ この家の淫靡さを感じとることができた

三年生だけが過ごす家。私たちがここでなにをしてていると思う？」

そのとき、ドアの向こうで音がした。

ぎし、ぎし。

誰かが階段を上がつてくる。力強さで、男性だとわかつた。

ご主人様だわ、お帰りになつたのよ、お姉さまたちがそう言ひながら、一斉に私から離れる。皆身だしなみを整え始めた。

最初のお姉さんだけは私に寄り添い、感じてしまつて膝をガクガク

させる私を抱いて、支えてくれる。

「ご主人様もきっと、あなたを気に入ってくれるわ。そしたらこの家で、ずっと幸せに暮らせるのよ」

「ずっと、ここで……？」

ぎし、ぎし。

力強い足音は、なおも近づいてくる。

あ、ダメ。

この近づいてくる気配だけで、イッちやいそう。

目の前のドアが開いたら、私きっと、その瞬間に……！

ぎし。ぎし。

足音がドアの前まで來た。

狂ったようにオナニーを続けながら、私は喘ぎ続けた。

「あああ、はあああん！」

ああ、開いちやう。ドアが開いちやう。
私、二度と戻れなくなる！

ドアが開いた瞬間、私は最高のアクメに達して叫んだ。

「ゞ、ゞ、主人様、今年の三年生がイクところを『らんください！』
うか私もここで飼ってください！ あああ、イクうううう！」

4100字 (了)